

中世津島の景観とその変遷

山村 亜希

I はじめに

(1) 戦国期城下町空間の系譜

戦国期・織豊期における城郭や城下町空間の復原研究が、学問分野の垣根を超えて、盛んに行われるようになってからずいぶん久しい。学際的な交流の端緒となったのは、1980年代から1990年代にかけての小島道裕・千田嘉博・前川要による研究であった¹。そこでは、戦国期城下町が一般的には、主従制の論理の貫徹する家臣・直属商工業者居住域と無縁の論理に支えられた市場・町から成る二元的な空間構造を有しており、この二元構造が織豊権力によって一元化されるというモデルが示された。しかし、近年では全国の戦国期城下町遺跡の発掘成果の増加にともない、小島・千田・前川の提示した城下町発達モデルに対して異なる見解も示されるようになった。2004年8月に行われた守護所シンポジウム@岐阜では、戦国期城下町は地域の個性的な社会・権力・文化・宗教構造のあり方を反映し、必ずしも二元構造のみでは説明できない多様な空間構造を呈していることが強調された²。これをふまえると、現在は戦国期城下町を地域の視点に立ち戻って再検討する時期に来ていると言えよう。そうであれば、その地域における城下町以外の都市のあり方が、城下町の空間構造に与えた影響を忘れてはならない。例えば、山岳寺院を核とする宗教都市の空間構造は、近江から北陸にかけての戦国期城下町の形態を規定した³。畿内の寺内町の空間構造が、求心性という点からは周囲の戦国期城下町よりも先進的であり、両者が相互に影響しながら都市を発展させたことも指摘されている⁴。それでは、東海地域の戦国期城下町には、どのような既存の都市空間が影響を与えたのであろうか。東海地域、特に尾張は織豊期城下町を全国に展開させた統一権力を生んだ地域であり、最終的

には近世城下町へとつながっていく「勝者」の都市づくりの原点を内包しているとも言える。尾張の戦国期城下町の空間構造を、地域の視点から問い直すことは、尾張のみならず、全国の中近世都市の系譜を辿る上で重要な課題であると考えられる。既に尾張の守護所・戦国期城下町の系譜を再検討した鈴木正貴も、信長期清須と小牧の景観を比較し、小牧以降に出現する長方形街区と短冊形地割の町屋が、津島や那古屋といった尾張地域の既存都市に由来する可能性を示している⁵。そこで本稿は、東海地域における戦国期城下町の空間構造の系譜を考える準備として、初期織田政権の経済基盤ともなった⁶尾張津島を取り上げ、その景観を復原することとしたい。

(2) 中世津島の景観研究

貞応2(1223)年の『海道記』には、「津島渡」が国境の渡し場であり、その周囲は桑畑や野が展開する農村的風景であった様子が描かれている⁷。一方、大永6(1526)年の『宗長日記』には、伊勢桑名に渡る湊の津島には家並が展開し、津島社の立地する向島へは橋が架けられ、橋の下に多くの船が停泊する景観が描かれる⁸。これらの史料にみえるように、13世紀から16世紀の間に、津島は単なる渡津から湊町に成長した⁹。さらに黒田剛司は、14世紀に下門真荘の津・市場・問の機能が芽生え、15世紀には多くの商職人が流入し、16世紀までに湊町・津島社の門前町として発展をとげ、津島五ヶ村¹⁰という共同体組織を形成したという発展過程を推定している¹¹。

さて、16世紀の湊町・津島の景観は、先の『宗長日記』に「此所のをのをの堤を家路とす」と表現されていることから、自然堤防上に集落を形成していたとされる。現在の津島旧市街も、天王川東岸の自然堤防上に長く延びており、この形態を『宗長日記』の描写と重ね合わせて中世の景観を想像することは容易であろう。

しかし、これはあくまで中世最盛期の津島の景観であることに注意しなくてはならない。中世を通じて津島が経済的に発展を遂げ、渡津から湊町・門前町へと機能を変化させる間、町場の形態も当然変化したはずである。それは、自然堤防上における町場の単なる範囲拡大なのだろうか。また、津島の町場はどこを起点として発達したのだろうか。この点については黒田が、地

名や同時代史料・近世地誌・絵図の記載をもとに、前述のように自ら推定した津島の発展過程に呼応する景観を考察している。黒田は、14世紀前半頃から天王橋に近い堤下町の集落が成立し、14世紀後期以降になって、その周辺部に米之座が、続いて今市場の市が成立したと推定する（地名は図2参照）。このうち米之座は下門真荘の荘津でもあったとする。15世紀には、巡見街道沿いに中島が、その後筏場が形成され、それぞれが惣村化し、津島五ヶ村が成立したと推定している。このように黒田の考察は、地理的には連続しない5つの町場が、堤下→米座→今市場→中島→筏場と順番に成立し、津島五ヶ村に至ったことを想定する点に特徴がある。景観を描写する同時代史料が極めて少ない中世津島において、様々な資料を駆使し景観変遷の推定を行った先駆的研究と評価したい。

しかし、黒田の推定は、2つの点から再検討の余地がある。第一に、明治24年測図20000分の1正式地形図¹²と明治17年作成の地籍図¹³という地理資料を用いた空間分析を行っていない点である。津島は古木曾川水系下流部の自然堤防地帯とデルタ地帯に位置し、津島の景観に地形条件の与えた影響は大きかったことが想定されるが、明治の地形図と地籍図を合わせて分析することで、微地形や旧地形を一定程度復原することは可能となる。また地籍図の地割形態からは、町場の変遷を推測することができ、黒田も利用した地誌類・地名などの資料と組み合わせて分析することができる。第二は、町場や寺社、街路、地形といった景観の諸要素相互の位置関係の考察が不十分な点である。これらの諸要素を地図上に落として空間的に把握することで、景観変遷の推定を深化させることができると思われる。

このような歴史地理学の方法と視点をもとに、本稿は中世津島の景観変遷過程を考察することを目的とする。第Ⅱ章では、主として地形図と地籍図の分析を通じて、中世段階の津島の旧地形を復原する。第Ⅲ章では、第Ⅱ章の結果をふまえて、寺社の立地と地籍図の地割形態を分析し、中世津島の景観を復原する。

Ⅱ 中世津島の地形

津島は天王川東岸に延びる集落で、西岸の向島には津島神社が立地する(図1)。天王川は中世までは旧木曾川水系の主要な流路であったが、天正14(1586)年の木曾川の流路変更によって水量が減少し、それは港湾都市・津島の衰微につながった¹⁴。さらに慶長15(1610)年の御囲堤の築造によって、河流はますます衰退した。天明5(1785)年に天王橋の場所に堤を築き、上流部の水を日光川新流路に導入する工事が行われた結果、ついには天王川上流部は埋め立てられ、天王橋下流のみが入り江状になった。このように、天正14年以降近世には、天王川上流部からの洪水による地形改変の回数は減ったと考えられる。そうであれば、明治の正式地形図(図1)や、字界・等高線の形状(図2)、明治17年の地籍図(図3)から、近世以前の天王川の氾濫と土砂堆積による微地形の痕跡を読むことも可能であろう。そこで、図1～3をもとに、近世地誌類や伝承、地名などの情報も加えて、中世津島における河道と自然堤防、後背湿地の形状を推定する。

(1)天王川河道と低地

天王川は、木曾川支流の三宅川・日光川の下流部にあたる。日光川は天明5(1785)年に新河道が開削される以前は、松川堤に沿って流れ、向島の小字十二城付近で三宅川と合流していたと推定されている(図1)¹⁵。つまり、津島集落のすぐ北側で、旧日光川と三宅川が合流していたことになる。津島から天王川・三宅川の上流約3.5kmには、織田弾正忠家の拠点・勝幡城が立地していた¹⁶。

天王川は津島の南西で佐屋川と合流する。佐屋川は、正保3(1646)年に木曾川本流の放水路として開削された川であるが、図1の旧河道の痕跡から、向島以西の部分は、それ以前にも存在した領内川の河道を利用していると考えられる。

三宅川と日光川の合流により、日光川の水は対岸の天王川東岸を直撃し、滞水域を形成することが想定される。地形図を見ると、水田が天王川と上街道との間に広く分布し(図1：a地区)、上街道をのせる自然堤防に一部切れ目が生じていることが分かる(図1：○部分)。図2の字界線を見ると、上街

道の東側後背湿地に広がる小字小沼口が、この部分で西に大きく湾入している(図2：a地区)。この湾入部分を含めて「小沼口」という字名がついていることから、この付近で自然堤防が切れ、東側の後背湿地に続く低地の入口となっている状況が推定される。つまり、この付近は入り江状の滞水域ないし低湿地が存在していたと考えられる。この低地はどこまで広がるのであろうか。小字小沼口の湾入部の南は城ノ越と呼ばれる(図3)。城ノ越は、元和4(1618)年から天和3(1683)年まで尾張徳川藩の津島御殿が存在したこと由来する地名である。図3の地籍図には、長方形を形作る細長い水田が城ノ腰に確認できるが、これが津島御殿の堀跡であろう¹⁷。近世初期の御殿建設の際、中世の町屋密集地区ではなく、ある程度まとまった空闲地を確保できる土地が選ばれたとするならば、御殿建設以前は城ノ越まで低湿地が広がっていたことが想像される。城ノ越の南は高屋敷と呼ばれる。ここも津島御殿の屋敷内であることに由来する地名であるが、「高」屋敷と呼ばれていることから、北の城ノ越に比べて比高差のある土地であったと推測する。したがって、小沼口から続く低地は南に城ノ越まで広がり、高屋敷に至って少し高くなっていたと思われる。

しかし、天王川東岸の低地は、小沼口—城ノ越地区だけではなくだろう。図3の上街道沿いの地割に注目すると、上街道の西側(天王川側)は、東側に比べて短冊形地割の形状が不統一で分布も連続しない部分が多いことが分かる。上切・谷町・横町・西御堂などにおける上街道沿いの地割の西裏には、大型のブロック型地割が展開する。これは、上街道東側に比べて西側は、町屋の形成が遅れたことを示しているだろう。その理由は、上街道西側が自然堤防の内側に位置し、天王川の氾濫にあいやすい低湿地か、旧河道であった¹⁸ことが考えられる。例外的に、図3のa—b, c—dの東西街路沿いには、短冊形地割が密に並ぶが、それはc—dが天王橋を経て津島神社へ向かう参道にあたるため、門前の町屋が立ち並んだことを示しているだろう。逆に言うならば、天王橋の架橋以前には、ここも低地であった可能性がある。a地点に立地する金燈籠社は中世以来の津島社の遙拝所である。津島社を遙拝できるということは、対岸まで見通しがきくということであり、中世には遙拝所と向島の間が低地で開発が遅れていたことを推測させる。

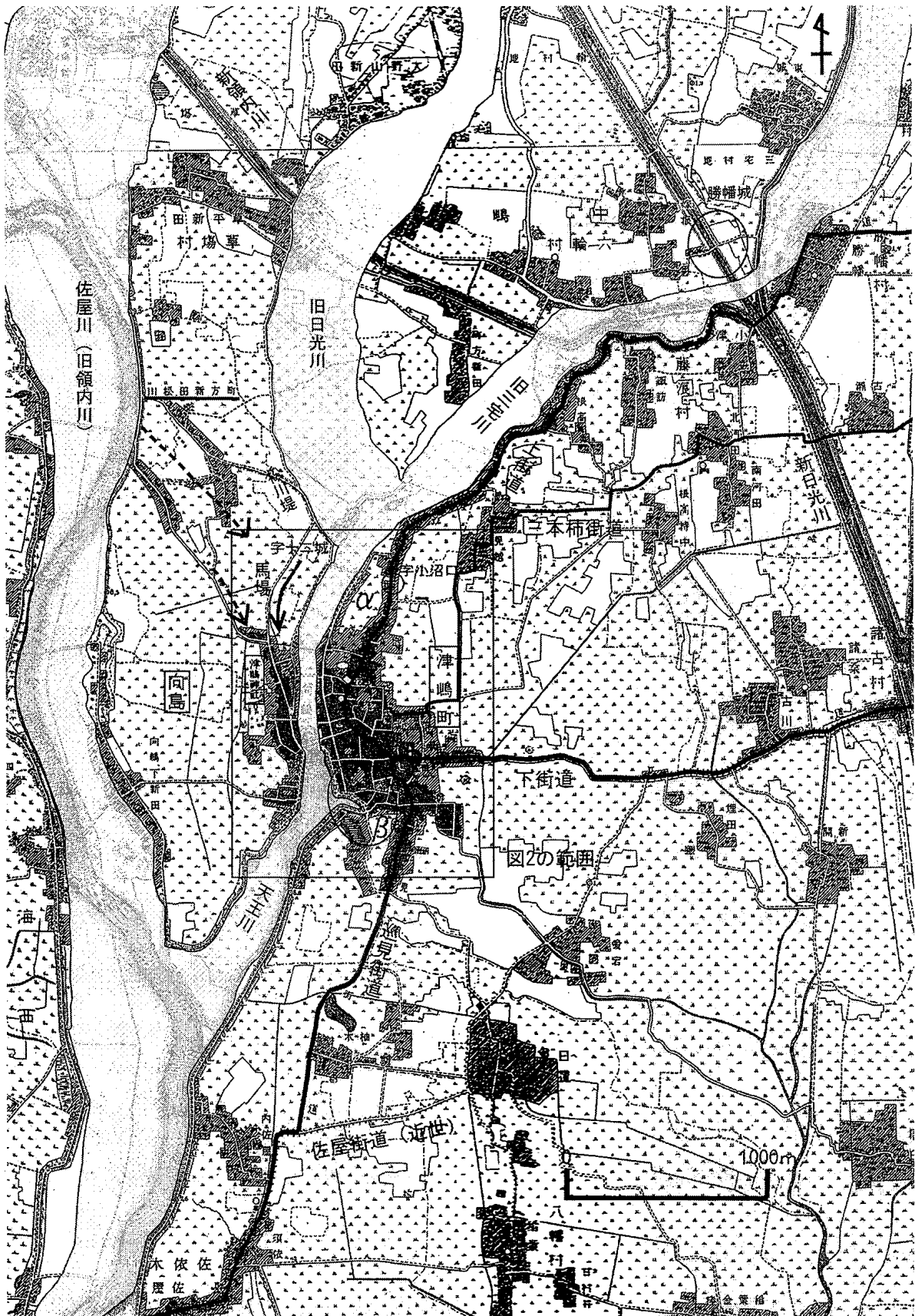


図1 津島周辺の旧河道と街道

ベースマップに明治24年測図同26年製版「津島町」・「稲沢町」20000分の1正式地形図を使用した。

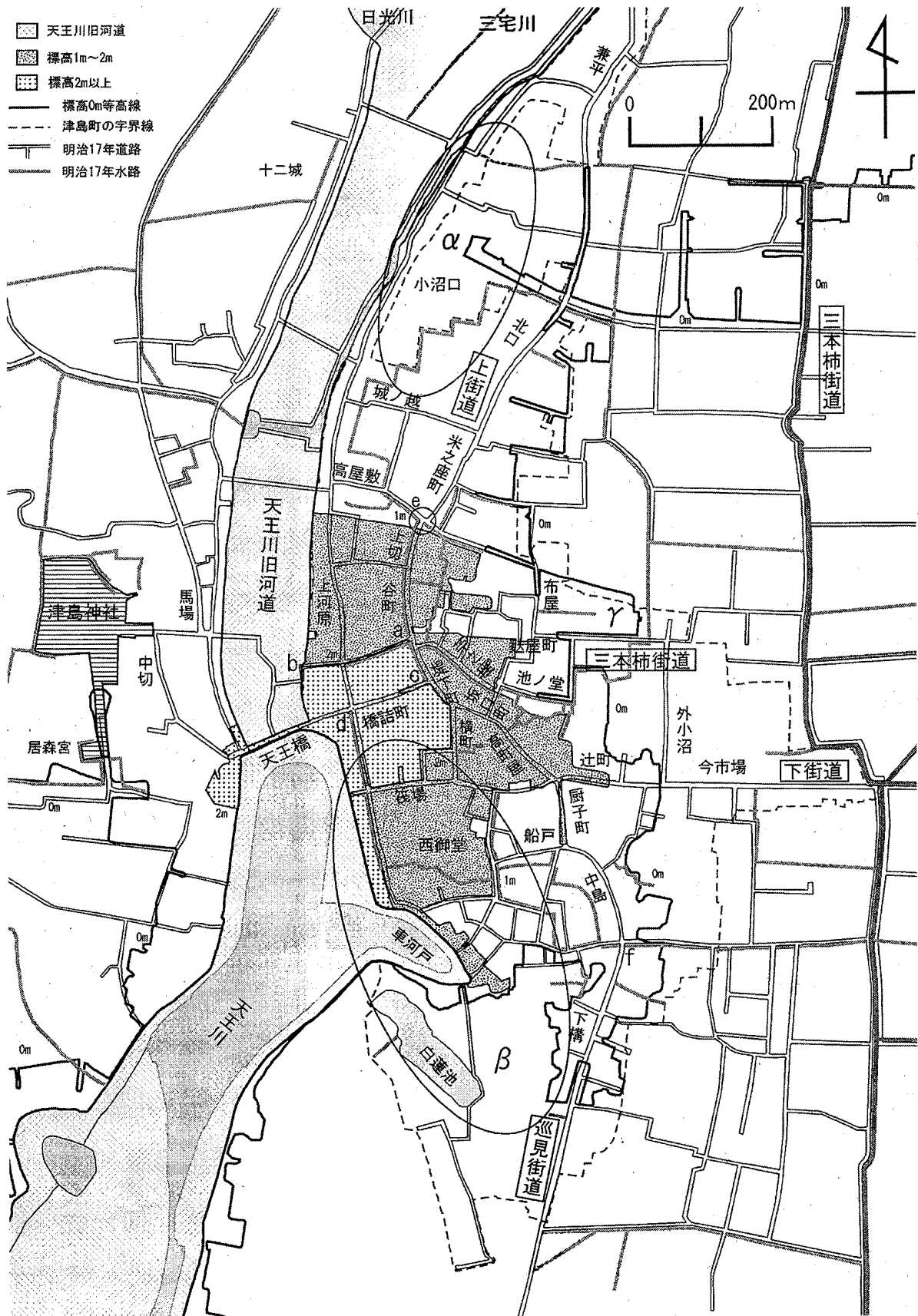
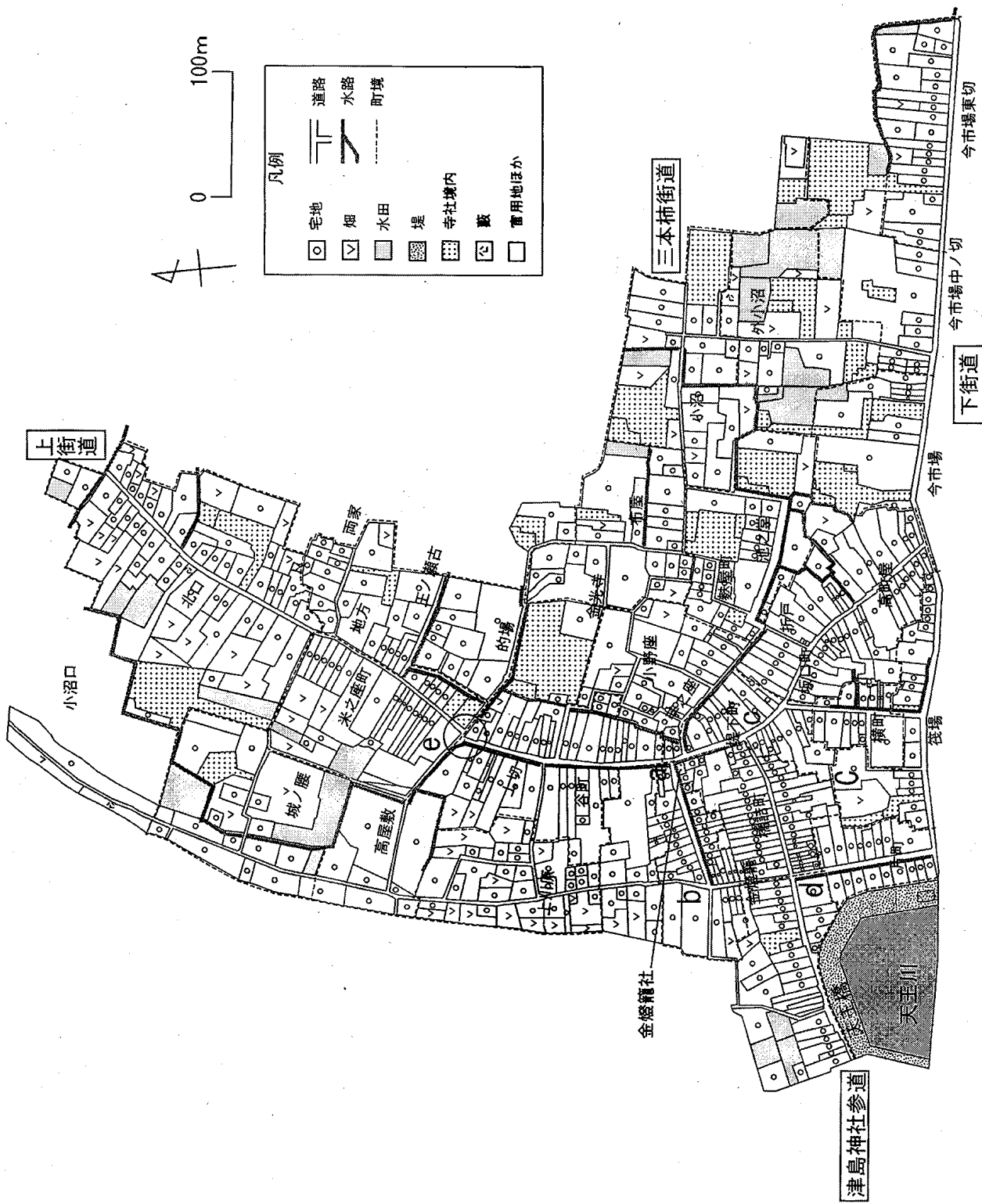


図2 津島の地形と町名

道路と水路，河道は，明治17年津島村・向島村地籍図(愛知県公文書館所蔵)による。等高線は，平成14年測図の津島市都市計画基本図(2500分の1)による。町名・地名は，延享5(1748)年作成の『尾張国海西郡津島之図』(愛知県海部郡津島町編『津島町史』1938付図として刊行)による。連続模様は森三紀による。



凡例

宅地	道路	水路	町境
畑	水田	堤	寺社境内
藪	雷用地ほか		

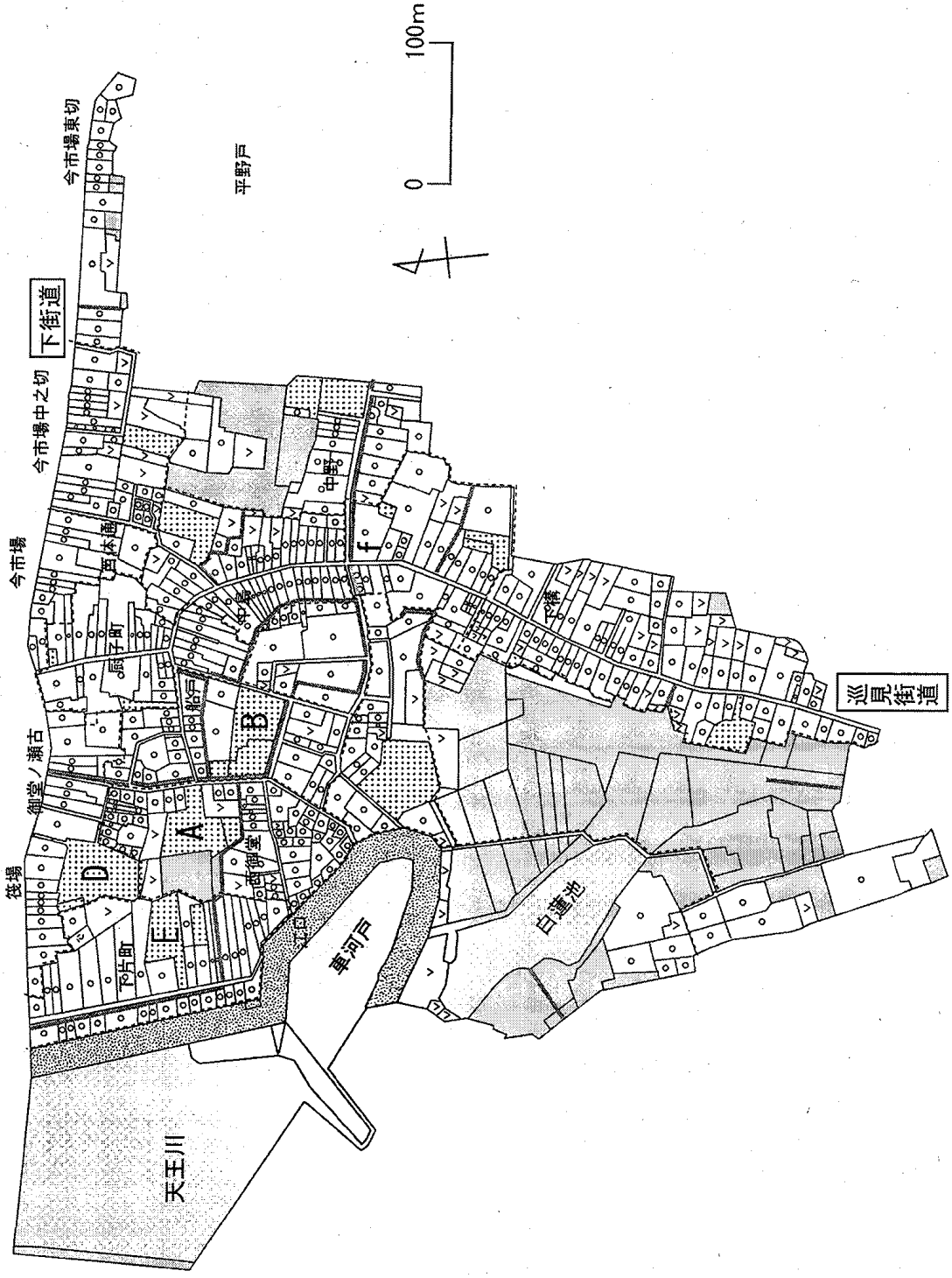


図3 津島村地籍図

明治17年津島村地籍図・甲・丙(愛知県公文書館所蔵)をトレースし、延享5(1848)年作成の『尾張国海西郡津島之図』(愛知県海部郡津島町編『津島町史』1938付図として刊行)記載の町名・地名を加えた。津島町内の町境は、地籍図に記載がなかったため、平成14年測図津島市都市計画図(2500分の1)より、現行の町境を抜き出して示した。連続模様は森三紀による。

さて、『張州雜志』によると、14世紀ないし15世紀に創建される西御堂の西福寺(図3:A)は大池を埋めて寺地を確保したとされる。また、中島をのせる自然堤防上の巡見街道が大きく東に湾曲していることを合わせて考えると、巡見街道西側の西御堂・船戸・筏場付近にも、低地が広がっていたと想定される。船戸の瑞泉寺(図3:B)、橋詰町の西方寺(図3:C)、筏場の善福寺(図3:D)、片町の浄光寺(図3:E)の創建・移転年代が、16世紀前期から17世紀と津島の中では比較的新しいことも、上述の想定の際証になるだろう。延享5(1748)年作成の『尾張国海西郡津島之図』(以後、延享5年図と略す)¹⁹には、入り江状の車河戸が瑞泉寺(図3:B)付近まで張り出しているように描かれており、近世段階においても低湿地は残り、一部滞水していたことが分かる。現在も残る車河戸は西御堂・船戸・筏場に広がっていた低地、ないし滞水域の名残であろう。車河戸の南には、寛文2(1662)年の大洪水によって形成されたとされる白蓮池も存在しており、この周囲が上述の小沼口一城ノ越とならんで、天王川東岸低地の中でもとりわけ低く、滞水しやすい場所であったことが分かる(図1・2:β地区)。

天王川の形成する低地は、東岸の津島側にだけ広がっていたのだろうか。字十二城の三宅川・日光川合流地点において三宅川の勢いが強いときには、向島方向へ大きく河道が湾曲することが想定される。向島の馬場の街路は、弧を描くような形状をしており(図1:実線矢印)、天王川の河幅が広いときに形成された堤であったと考えられる。つまり、天王川の河幅は最大で馬場から上街道付近まで広がっていた可能性がある。大永6(1526)年の『宗長日記』に「橋あり。三町あまり。勢田の長橋よりは猶遠かるべし」という表現があるが、上街道以西が天王川河原で、そこから向島まで橋がかかっていたと考えれば、『宗長日記』の記載する橋の長さは全く現実と合わない数値でもないだろう。なお、デルタ地帯である向島の町方新田松川、馬場、津島神社門前の集落形態は、いずれも北西から南東へと細長く続いており(図1:点線矢印方向)、このデルタでの氾濫は特に北西から南東方向へ顕著であったことが想定される。この方向の氾濫が天王川対岸の津島町にも影響を与えたため、その攻撃面にあたる筏場・西御堂・船戸・車河戸周辺(図1・2:β地区)が、先述したようにとりわけ低い滞水域になったと考えられる。

(2) 自然堤防と後背湿地

図2には、平成14年測図の津島市都市計画基本図(2500分の1)から0m、1m、2mの等高線を抜き出して示した。この等高線は、現代までの整地・盛土の結果であり、自然地形を直接示すとは言えない。特に前節で推定した天王川東岸の低地については、近世以降津島神社の門前町として津島が繁栄するにつれて町が稠密化し、埋め立てや整地、立て替えが繰り返されたと思われる。現在の等高線からはその形態を推定することができない。しかし、上街道・巡見街道の東側に関しては、等高線は自然地形に対応したと思われる凹凸のある曲線を描いている。そこで、地籍図(図3)や地名なども参考にしながら、図2をもとに自然堤防と後背湿地の形態を推定しよう。

図2の0m等高線をたどると、上街道・巡見街道という南北の街道に沿って、北は北口と小沼口の字界から南は下構まで、微高地が連続して南北に伸びているように見える。その東側には後背湿地が広がっている。ここで1m等高線の形状に注目しながら、さらに微地形を検討したい。

1m等高線は上切と米之座町の間を走る。ここに上街道の食い違いが見られる(図2・3:e)ことは、北の米之座方向から伸びる集落と南の上切方向から伸びる集落が、別個のもの、あるいは時期が異なることを示唆しており、地形的にも両者が連続していなかったことを推測させる。

次に、谷町と堤下町の堺に1m等高線が西側へ入り込み、低くなっている(図2:a)ことに注目しよう。図3の地籍図をみても、谷町と堤下町の堺(図3:a)は低くなっているためか、ここに水路が集まっており、両町の短冊形地割も形が異なる。これらのことから、堤下町の立地する自然堤防は、文字通り「谷町」という低地で一旦途切れていたものと思われる。

米ノ座町と堤下町の間の上切・谷町には、前節のように、天王川東岸低地が上街道近くまでせまっていると推定される。上街道の東側には、図2にみえるように0m等高線が布屋を含むように東に張り出しており(γ地区)、後背湿地の中でもやや高い土地が東に広がっていた。

それでは堤下町以南の微高地はどこまで続くのだろうか。現在、堤下町から南東に伸びる微高地は、上街道に沿って、坂口町辺りで最も高くなり、高町屋でゆるやかに下る。1m等高線も高町屋・辻町まで続いている。堤下町

の東側の1 m等高線は、苧之座・麩屋町まで広がる。苧之座の南東に池ノ堂という地区があるが、『張州雑志』や『尾張志』²⁰は、ここに立地する宝泉寺が16世紀前半に創建される時池を埋め立てたと伝える。図3の地籍図でも池ノ堂に水路が集まっていることが分かるので、この付近は後背湿地だったのである。つまり堤下町の裏手のみ苧之座をのせる微高地が続き、坂口町・高町屋の裏手はすぐに後背湿地となっていたものと思われる。坂口町・高町屋の微高地は、下街道に沿って今市場方向に少し延びていた。

1 m等高線は辻町・高町屋で切れている。また、中島を通る巡見街道は東に円弧を描いており、その形状は上街道や厨子町の街路の方向と全く異なる。ここから、厨子町を地形の堺として、南北に別の自然堤防が存在していた可能性が高いことを指摘できる。中島で円弧を描く巡見街道の西は、前述したように、低湿地ないし滞水域となっていたと考える。地籍図でみると、中島の東側の中野は水田の広がる後背湿地となっており、中島の微高地は巡見街道沿いのみに展開していたと思われる。中島の微高地南側は、f地点で一旦大きな水路により分断されるが、短冊形地割の連続する下構集落をのせるように南に延びていたと思われる。

このように、街道沿いに連続しているように見える微高地も、米之座町―上切間、谷町―堤下町間、厨子町に低地が入り込み、実態としては複数の微高地が「島」のように分布していたと考える。また、それらの「島」は必ずしも同じ方向・形状ではなく、中島と高町屋との方向性の差異や、苧之座における微高地の張り出しにみられるように、異なる方向・形状をしていたと思われる。

Ⅲ 中世津島の景観変遷

本章では、中世津島の景観を時期別に復原し、その変遷過程を考察する。表1は、同時代史料や近世地誌類から、寺社の創建年次、場所、宗派の変遷を整理したものである。地籍図上に存在時期別に寺社の記号を分け、その立地を地図化したものが、図4・5である。

(1)14世紀後半～15世紀(図4)

14～15世紀には、寺社は下街道以北に多く分布する。なかでも、米之座町周辺に比較的まとまって立地し、三本柿街道周辺と今市場周辺には複数の寺社が点在していた。

米之座町の市神社(★1)は、弘和元(1381)年創建と伝える。市神は開市を示すもので、全国の中世市町・城下町にしばしばみられるものである。ここで注目したいのが、市神社の立地である。市神社は他の津島の寺社とは異なり、上街道に直接面して立地している。これは、米之座町の家並が本格的に展開する以前に市神社が勧請されたことを示すだろう。市神社の隣には、同じく上街道に直接面する観音寺(■13)が存在する。観音寺の創建は15世紀半ばと市神社には遅れるが、時宗寺院であり、時宗寺院が市場の経済的利権を目指して進出したものと思われる²¹。そうであれば、米之座町には14世紀終わりから15世紀半ばにかけて市神の勧請とともに市が開かれ、その後町並が形成されたと推定される。米之座町の町並が早くから形成されていたことの傍証として、上街道の西側で奥行き長い短冊形地割の連続がみられるのは、米之座町のみであることが挙げられる。前節で推定したように、上街道の西側は低地であり、奥行き長い短冊型地割の連続は、早くに低地が開発され町場化したことを示唆する。しかも米之座町西側の短冊型地割群は、背割線のそろった整然とした形態をしている。これは、町場に統制ないし規制がかけられたことを推測させるが、そのときに注目したいのが、前章で推定した小沼口一城ノ越の入り江状の低湿地である。短冊形地割は、裏手の低湿地の整備に規制されて、背割線が直線にそろったのではないだろうか。小沼口が日光川・三宅川両方の上流部との連絡が可能で、上街道にも近い水陸の結節点であることを考えると、低湿地の整備とは湊の整備であると推測する。湊の形状が短冊形地割に影響を与えているとすると、この湊は米之座市・町と密接な関連を持っていたことになる(以後、米之座湊と呼ぶ)。既に黒田も、米之座を13～14世紀の荘園の市場を起源とする市場と考え、小沼口の湾入に荘園からの物資を搬入・搬出する湊を想定している。また、14世紀には創建されていた大龍寺(□1)が米之座湊を管理していたことも推定している。本稿も、地籍図の地割と微地形を分析した結果、黒田の推定に同意したい。米之

表1 津島における寺社の存続年代と位置

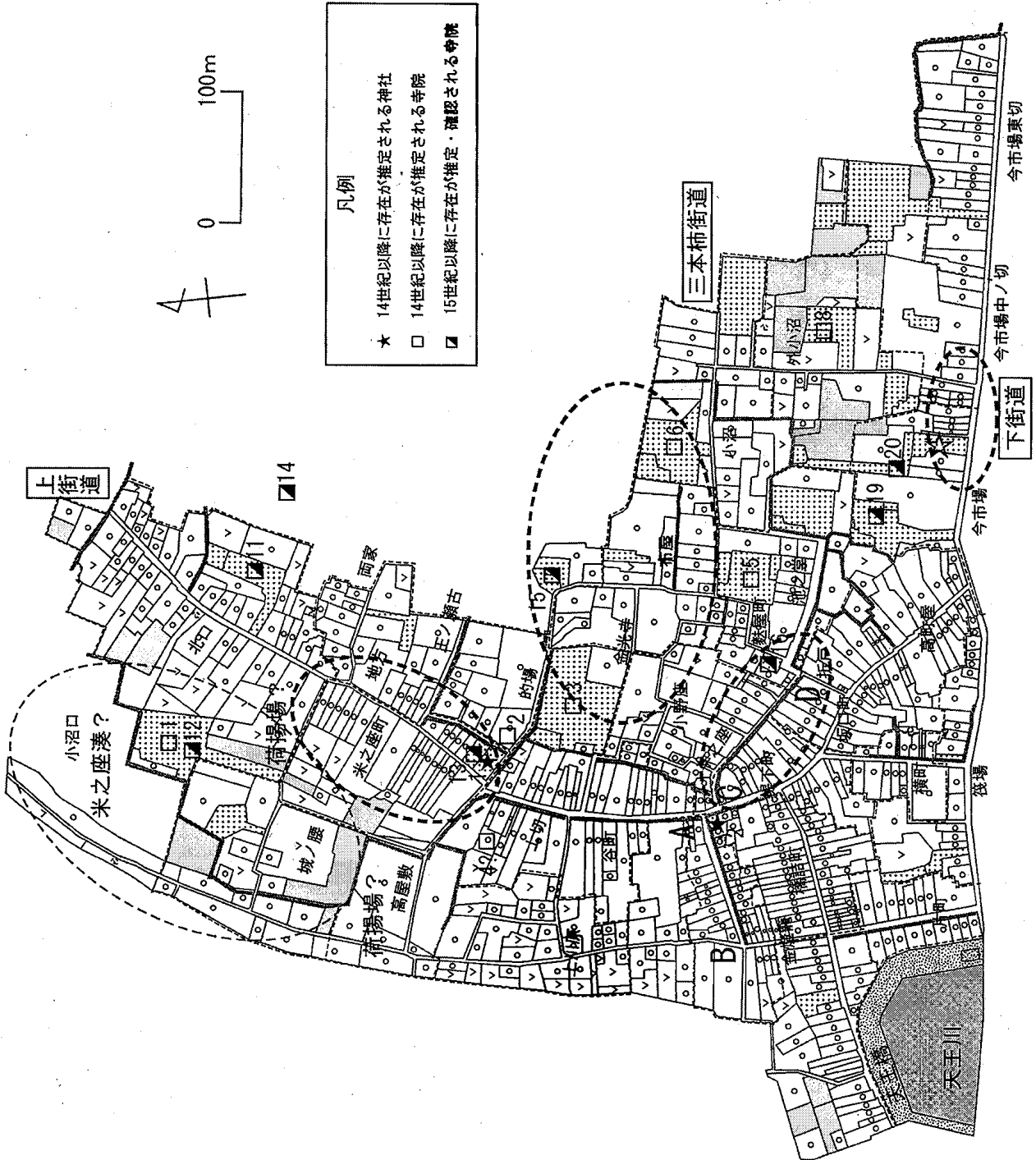
No.	名称	存続年代 位置 宗派	備考
神社			
1	市神社	社伝：弘和元(1381)創建／図会：米座	津島神社末社。氏子圏は、米之座町・北口・高屋敷・池之堂・麩屋町・布屋・芋之座。
2	金灯籠神社	市史2：延■(文カ)(1357カ)2・6・15鉄灯籠あり／堤下	津島天王末社。津島社の遙拝所。
3	白山社	市史131：天正20(1592)5・6観音坊宛に白山権現と先達屋敷の地子米免除	観音坊と関連。
4	八剣社	八剣宮棟札：永正2(1505)1・16 延享5年図：現在地(中野)、洪水で中野町に移転／真言宗	津島天王末社。八剣社の氏子は、中野・中島・厨子・下構。
寺院			
1	大龍寺	市史10：明徳2(1391)12・9銘宝篋印塔あり～図会：永享8(1436)創建～市史：文明12(1480)4・4銘宝篋印塔あり～府志・尾張志：天文年間(1532-1554)再興～市史188：天正4(1576)11信忠、大隆寺并未末寺宛に禁制～市史195：天正10(1582)8信雄、大隆寺并未末寺に禁制／北口町／浄土宗	浪合記：尹良親王の菩提所、寺伝：尹良親王の子良王君の創建
2	日光坊	府志・尾張志：貞和2(1346)銘鱈口あり／府志：的場／修験道	
3	成信坊	成信坊世代(徇行記)：明徳2(1391)頃天台宗から真宗へ改宗～教如書状(雑志)：天正9(1581)カ・3・21／図会：芋之座／浄土真宗	徇行記：堀田新右衛門屋敷。
4	新清水寺・金剛院	府志・尾張志：観応2(1351)年名鱈口あり／尾張志：上切(現存せず)	
5	本蓮寺	徇行記・図会・尾張志：明徳3(1392)中根村より麩屋町に移転／図会：麩屋町／日蓮宗	奴屋城主・大橋信重(良王君の嫡子)の菩提寺と伝承。
6	常楽寺	徇行記：応永6(1399)開基～桃林寺銅鐘：永享8(1436)11・24初見／図会：小沼／曹洞宗	津島神社神主家氷室氏の創建、菩提所。
7	教津坊	尾張志：嘉禎元(1235)再興、図会：承元年間の初め(13世紀初期)／尾張志：船戸～徇行記・尾張志：明徳3(1392)船戸から今市場へ移転～市史61・徇行記：天正3(1575)カ・1・8飛鳥井雅教の助力で改号／図会：今市場町／真宗高田派	
8	蓮台寺	図会・尾張志：貞和年中(1345-50)の建立、雑志：西福寺と同時期に創建、市史5：貞和3(1347)4・18銘弥阿上人坐像あり～市史21：文明2(1470)7蓮台寺初見～市史40：天文3(1534)4・2銘五輪塔あり～市史71：(年不詳)8信長、堀外の屋敷と寺領を寺衆支配とする～市史85：天正3(1575)3信忠、堀外の屋敷と寺領を寺衆支配とする～市史87：(天正4(1576)カ)10・28信長近臣の矢部光佳、宿老中に「東之御堂色成」の免除指示／図会：外小沼／時宗	徇行記：織田信濃守屋敷。浪合記に登場。大檀那は堀田家。
9	貞寿寺	図会：延享元(1308)創建、雑志：元文3(1738)今市場に移転／図会：今市場町／浄土宗	
10	西福寺	府志・尾張志・図会：貞和4(1348)創建、雑志：永享年間(1429-1440)頃創建か、大池を埋め立て建立～市史30：永正14(1517)10・19銘五輪塔あり～市史58天文23(1555)1・9銘五輪塔あり／図会：船戸／時宗	堀田家の菩提寺。堀田道悦が中興。蓮台寺(東御堂)に対する西御堂。
11	雲居寺	尾張志：永享12(1440)服部家継創建、市史11：応永9(1402)6・21銘宝篋印塔あり、市史13：応永12(1405)銘宝篋印塔あり、市史17：正長元(1428)6・6銘宝篋印塔あり、市史31：永正17(1520)5・28銘五輪あり 北1町 曹洞宗	服部家創建。良王君と関連。
12	海善庵	町史：雲居寺第2世創建／大龍寺門前～町史：17世紀末に廃絶、嘉永3(1850)再興／米之座町	
13	観音寺	寺伝：享徳2(1453)堀田正道の後援で創建～雑志：享保20(1735)中興／時宗	
14	不動院	仏殿前机裏書写(徇行記)：応永7(1400)甘露王寺～附法状写(徇行記)：享徳3(1454)大聖院～政長上人棟札写(徇行記)：永正15(1518)正覚院～宗長手記：大永6(1526)3旅宿の正覚院で織田正定・信秀と連歌興行～市史41：天文3(1534)5清泰寺～市史44：天文8(1540)8銘五輪塔あり～政光上人請状(徇行記)：天文10(1542)清泰寺正覚院～十世盛尊上人棟札写(徇行記)：寛文3(1663)清泰寺不動院 米之座町／真言宗	宗長手記：大永6(1526)3宗長、旅宿の正覚院で織田正定・信秀と連歌興行。
15	昭連寺	徇行記：文明5(1473)天台宗から真宗大谷派へ改宗、尾張志：文明5(1473)創建～市史35：大永4(1524)11・26銘宝篋印塔あり～寺伝：延宝2(1674)真宗本願寺はへ改宗	
16	地藏寺	徇行記・雑志：永享9(1437)以前創建 府志・延享図：小野座折戸／曹洞宗	

No.	名称	存続年代/位置/宗派	備考
17	瑞泉寺	雑志・図会：明応元(1492)死去の良王君菩提寺として瑠璃光寺を改号/府志・尾張志：天王島、境内に蓮池(鏡池)あり、延享図：ルリ小路～雑志：永正4(1507)筏場へ移転し大橋家の菩提寺になる、府志・尾張志・図会：永正14(1507)船戸へ移転/図会：船戸/浄土宗	大橋家の菩提寺。
18	正泉寺	尾張志：応永10(1403)創建/真言宗～寺伝：応永14(1407)曹洞宗に改宗/尾張志：現在地より2町許東方～市史32：大永3(1523)10・8銘五輪塔あり～尾張志：延享4(1747)薬師町(現在地)に移転、府志：下構/曹洞宗	雑志：堀田正重の法号・正泉寺。正泉寺は堀田家、澤井家の菩提寺。
19	妙延寺	徇行記・雑志・尾張志・尾張志・寛正5(1464)真言宗から日蓮宗に改宗、図会：永正年間(1504-1521)に改宗～市史24：文明14(1482)5・18銘宝篋印塔あり～図会：加藤清正が読書・手習いに来る/図会：今市場/日蓮宗	
20	延命寺	徇行記：永享9(1437)創建～徇行記：安永10(1781)再興・雑志：天明元(1781)中興/今市場町/曹洞曹	
21	大慶寺	雑志：永享9(1437)以前に創建/下構/曹洞宗	
22	龍淵寺	府志・雑志・尾張志：嘉吉元(1441)創建/今市場町/曹洞宗	平野家創建。近辺を平野戸(平野党)と呼ぶ。平野家一族が多く居住。
23	長谷寺	徇行記・雑志：文亀3(1503)創建～安永年間以降廃寺に/府志：上切/浄土宗	
24	西方寺	雑志：天文3(1534)12以前に創建～徇行記・尾張志：延享4(1747)橋詰町から布屋へ移転、府志：堤下から布屋へ移転/布屋/浄土宗	奴野城跡地。津島天王祭の尾張藩代参の宿所。
25	宝泉寺	市史33：大永4(1524)2・4銘五輪塔あり～徇行記・尾張志：天文4(1535)寂の喜叟源悦が開祖～市史45：天文9(1541)6・25銘五輪塔あり/雑志・尾張志：住古は池、埋め立てて建立、池之堂/浄土宗	
26	西光院	雑志：文禄5(1596)創建/池之堂(宝泉寺末寺)/浄土宗	
27	浄蓮寺	方便法身画像実如光兼裏書・徇行記：永正8(1511)2・19創建～天文8(1540)製作仏像4本あり～尾張志：もと亭の座にあり、寺伝：慶長13(1608)以前に堀田掃部頭宅跡の現在地(筏場)に移る/筏場西切/真宗大谷派	徇行記：堀田掃部頭屋敷跡。
28	弘浄寺	寺伝：永禄年間(1558-70)創建、雑志：大正18(1590)以前に創建/中島、徇行記：平野治太夫邸跡/浄土宗	徇行記：平野治太夫邸跡。
29	正楽寺	井堀山正楽寺記・徇行記・尾張志：大正2(1574)創建/下構/真宗大谷派	
30	吉祥寺	八剣宮棟札：永正2(1505)1・16/延享5年図：現在地(中野)、洪水で中野町に移転/真言宗	
31	興禅寺	雲版：延文3(1358)銘～府志・雑志・図会：永徳元(1381)創建、尾張志：応永3(1396)創建～市史14・15：応永17(1410)銘宝篋印塔あり～市史47：天文9(1540)9・25銘五輪塔あり～府志・雑志・図会：天正13(1585)大地震により諸堂廃没/尾張志：現在地より8町許東北にあったが、天文年間火災以降今市場町へ移転/図会：今市場/曹洞宗	津島神社筆頭道家・堀田右馬大夫家の菩提寺。
32	観音寺	市史56・59：天文22(1554)信長、三興宛に判物～市史84：天正2(1574)8・13津島三興観応坊宛に信長の判行をもって虚空坊職と寺領5ヶ村の先達を安堵。この時期までに津島に移転～市史131：天正20(1592)5・6観音坊宛に白山観現と先達屋敷の地子米免除/小沼/真言宗	津島神社神宮寺の一つ
33	蓮慶寺	徇行記：元和9(1623)10・27創建/今市場/真宗大谷派	
34	誓願寺	雑志：享保2(1717)頃中興/高町屋/浄土宗	
35	善福寺	市史38：享禄4(1531)12・3銘の五輪塔あり～雑志：元禄年中(1688-1704)に古木江村から筏場に移転/筏場/真宗大谷派	
36	浄光寺	徇行記：慶長11(1606)創建～徇行記：貞享元(1684)改号/片町/真宗大谷派	
37	日光院	徇行記：弘仁12(822)創建/徇行記：向島～徇行記/元和3(1617)中島へ移転/修験路	
38	本住寺	寺伝：寛文元(1661)下構に移転/下構/真宗大谷派	

表中の略称は以下の通りである。

市史：津島市史編さん委員会編『津島市史』資料編(2)、津島市教育委員会、1974、町史：愛知県海部郡津島町編『津島市史』愛知県海部郡津島町役場、1938、府志：『張州府志(全)』愛知県郷土資料刊行会、1974、徇行記：名古屋市教育委員会編『名古屋叢書続編7 尾張徇行記4』名古屋市教育委員会、1968、尾張志：浮田正韶編『尾張志(下)』歴史図書社、1969、図会：『尾張名所図会』大日本名所図会刊行会、1919。

表中の数字は図4・図5と対応する。



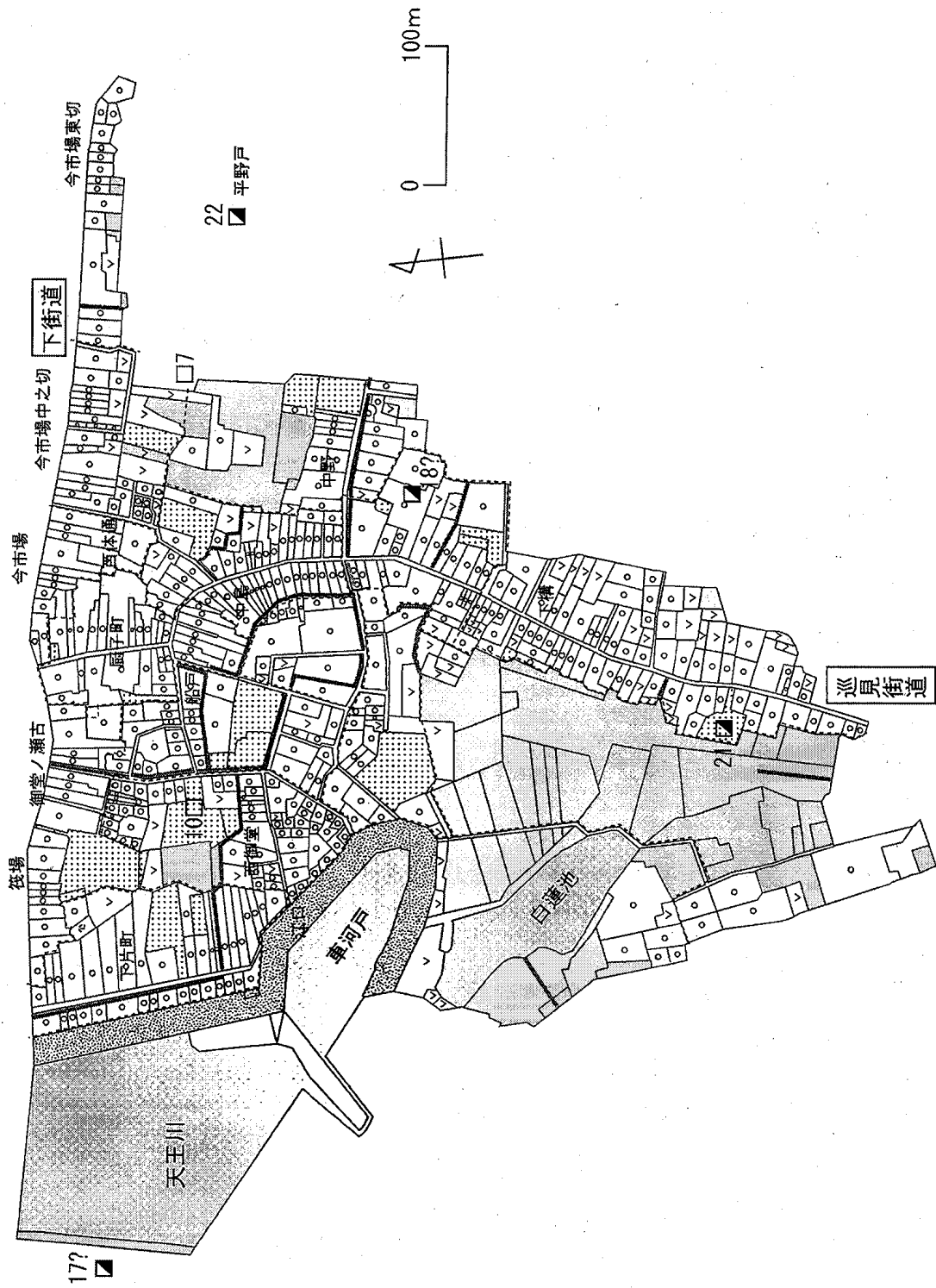


図4 14～15世紀以降に存在する寺社の立地
 図中の数字は表1と対応する。連続模様は森三紀による。地目の凡例は図3と同じである。

座湊から米之座市・町への物資は、高屋敷付近か米之座町北側に荷揚げして、市神社前の交差点まで運ばれたのではないだろうか²²。そうであれば、上街道沿いの北口集落を経由することなく、最短で市・町まで物資を運ぶことができる²³。黒田の推定するように、大龍寺が湊の利権に関与しているとするれば、大龍寺は天王川から荷揚場まで船の入港の一部始終を監視することができる位置にあることになる。また、上街道を挟んで大龍寺の反対側に不動院 (■14) と雲居寺 (■11) が立地することは、陸上交通の監視を意味しているのかも知れない。市神社の氏子圏に北口・高屋敷も含まれている²⁴ことから、米ノ座町を中心とした市・市町は、次第に隣接する上街道沿いの北口や荷揚場の高屋敷にまで拡大したものと思われる。

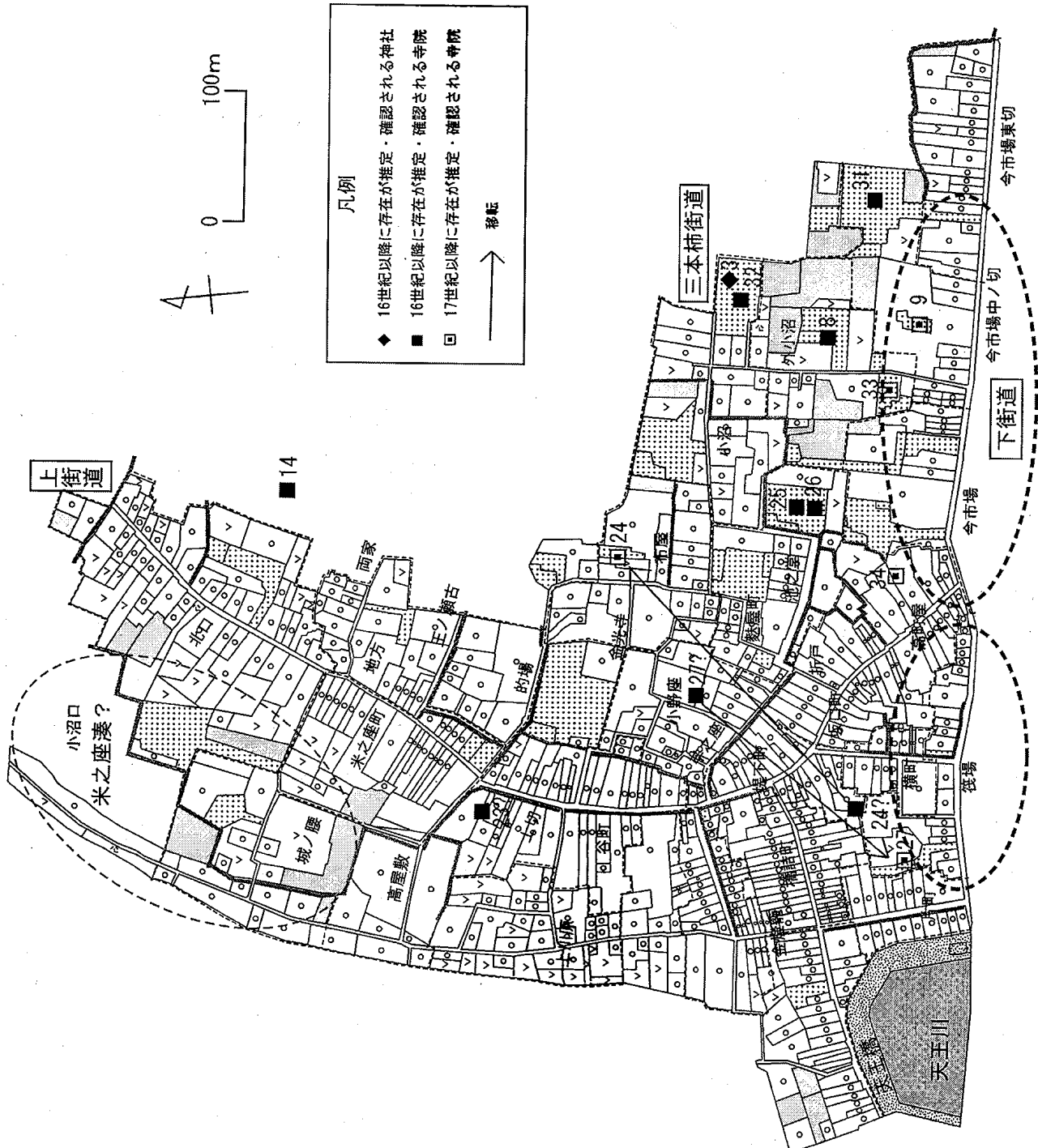
米之座町から市神社の南を東に入る道が的場であり、布屋・小沼を經由して三本柿街道に至る。この付近に創建の古い寺院が点在する。これは、当時の主要道として三本柿街道が機能していたことを示唆しているのではないだろうか。的場から布座にかけては、前章で述べたように若干高い土地が後背湿地に突出している。この微高地には、南朝の良王君が入城したとされる奴屋城推定地²⁵があり、良王君やそれを支えた四家七名字と呼ばれる家臣に関連する寺院(本蓮寺□5・蓮台寺□8)が立地する。この南朝貴種流離潭は史実としてはすぐには受け入れがたいが、米之座の市・町の背後にあたる三本柿街道の走る微高地が、14世紀末頃から利用されたことを示している可能性を否定することもできない。津島神社の神主家である氷室家の菩提寺・常楽寺(□6)も、三本柿街道沿いに立地する。『張州雑誌』は、奴野城を築いた良王君の家臣の大橋重長が米之座に住んだとしており、真偽のほどは不明ながら、市場と津島に定着した土豪との関連を推測させる。市神社の氏子圏に、布屋が含まれていることも、両地域が同時期に関連をもって存在したことの傍証になろう。

A地点には、14世紀半ば頃に創建されたと伝えられる金灯籠社(★2)がある。この付近の上街道の西側は低地であり、津島社の遙拜所である金灯籠社は、対岸の津島社を正面に臨む河岸の自然堤防上に立地したと想定される。津島の橋の史料上の初見は、大永6(1526)年の『宗長日記』であり、橋詰町・天王橋を通る参道がそれ以前から現在と同じルートに存在した証拠はな

い。むしろ14～15世紀に橋はまだ架けられていなかったとすれば、金灯籠社付近が向島へ渡る天王川の渡し場であったとも推測される。A—Bの街路と苧之座を通るC—Dの街路が食い違っていることは、これらの街路の形成時期が異なることを示しており、A—B道の開設が低地の開発以降とすれば、C—D街路の方が古くより機能していたと想定される。そう考えると、渡し場に直結する苧之座のC—D街路は、金燈籠社が創建された14世紀半ば以降には存在していたのではないかと考えられる。また、15世紀前期創建と伝えられる地蔵寺(■16)が、苧之座のC—D道路の端(D)から分岐する小路沿いに立地することは、15世紀前期までにC—D沿いに家並が形成されたことを推測させる。街道沿い以外の他地域と比較すると、苧之座のみ短冊形地割が両側に並んでいることも、苧之座が比較的古くから町並を展開させたことを示唆する。つまり、苧之座には、米之座や布屋周辺と同じ14世紀半ばから15世紀の間に町場が形成された可能性がある。布屋同様、苧之座も市神社の氏子圏であることも、この推測を支持する。

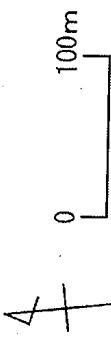
さて、苧之座は一見すると堤下町の裏町のように思えるが、市神社の氏子圏に堤下町は入らず、現在の津島祭の堤下車の車屋・乗り方に苧之座の家は全く含まれない²⁶。このことから、堤下町と苧之座に社会組織上のつながりは希薄なように思われる。そうであれば、苧之座と堤下町の町場は別の形成過程を辿ってきた可能性がある。西方寺は寺伝によると、天文3(1534)年以前に橋詰町と堤下町の裏に創建されたとされるが、この伝承が正しければ、堤下町の町並は遅くとも16世紀初期までに形成されていたと推定される。しかし、苧之座と堤下町の町場形成時期の新旧については、これ以上の推測は難しい²⁷。

下街道沿いの今市場には、米之座の市神社と同じ津島神社の境外摂社である土御前社(☆)が、下街道に直接面して立地している。14世紀半ばに創建されたと伝えられる時宗の蓮台寺(□8)も近くに存在することから、米之座町と同様に古くからの市の存在を推測させる。その中心は、微高地上の土御前社周辺であったと思われる。それは、津島祭の今車の車屋・乗り方の屋敷が、今市場の中でも土御前社周辺に集中していることから推定される。但し、「今」市場という地名からは、米之座や苧之座よりも、若干市立てが遅



凡例

- ◆ 16世紀以降に存在が推定・確認される神社
- 16世紀以降に存在が推定・確認される寺院
- 17世紀以降に存在が推定・確認される寺院
- 移転



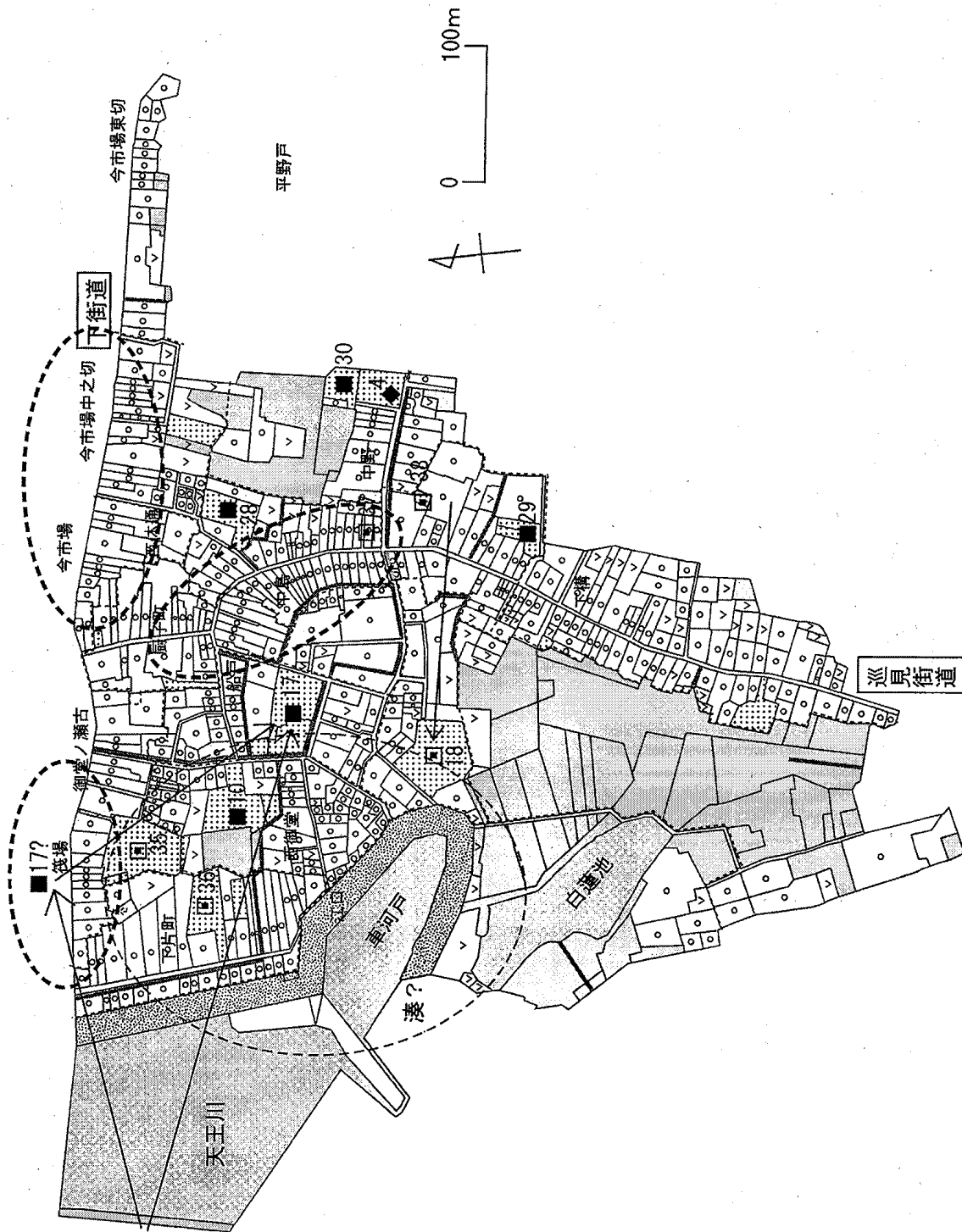


図5 16～17世紀以降に存在する寺社の立地
 図中の数字は表1と対応する。連続模様は森三紀による。地目の凡例は図3と同じである。

れた可能性も考えられる。15世紀中期以降、土御前社の周囲に2つの寺院(19・20)が建立されているが、これらは今市場の下街道沿いにおける家並形成に伴い、その裏手に創建されたのではないかと推測される。このようなことから、今市場の市ないし町の成立は、14世紀半ば～15世紀半ばであったのではないかと考える²⁸。

(2)16世紀～17世紀(図5)

16世紀以降には、池ノ堂から今市場東側にかけて寺社が多く立地するようになる。池ノ堂は前章で触れたように、後背湿地であり、ここに16世紀前半の大永年間頃に宝泉寺(25)が建立される。今市場の東側も後背湿地にあたるが、このような場所に天文年間に興禅寺(31)が、天正年間に観音寺(32)が移転してくる。これらの寺社の創建・移転は、今市場の発展に伴う後背湿地への開発の進展を示しているように思われる。

今市場の蓮台寺(8)は、少なくとも天正3(1575)年頃までに、境内を堀で囲み、堀の外にも寺領を持っていた²⁹大型寺院であった。また、天正4(1576)年頃、織田信長の近臣が津島五か村の宿老中宛に、同寺の色成免除を命じている³⁰ことから、蓮台寺は織田家とつながりが強く、津島の町場勢力と拮抗する力を持つ寺院であったことが推定される。また、その北の観音寺(32)も天正2(1574)年までに信長の安堵状を複数受けており³¹、津島の境界で三本柿街道に近い今市場東側の寺院には、織田家の支配が強く及んでいた可能性が高い。

16世紀以降には、天王川東岸低地の橋詰・筏場・西御堂・船戸にかけての一带でも開発が始まったと考える。この一带は、前章で推定したように、天王川東岸低地の中でもとりわけ低湿地で、中世には広い範囲が滞水していたと思われる。そのような低湿地に、天文3(1534)年には西方寺(24)が創建されている。また瑞泉寺(17)は、永正7(1507)年に筏場に移転、あるいは永正17(1520)年に船戸に移転してくると伝えられており、西方寺と同様、筏場周辺の低地部分に立地したと考えられる。このことは、筏場の町並が16世紀初期までに形成されたことも示しているのではないだろうか。ここで注目したいのが、現在の津島祭における筏場車の車屋・乗り方の屋敷分布であ

る。筏場車は筏場町が主体となる船であるが、その車屋・乗り方のほとんどは坂口町・高屋敷・横町に屋敷を構えているのである。つまり、筏場町は坂口町・高屋敷・横町と社会的なつながりが深いと言える。横町は、地籍図の地割の形状から、上街道と筏場町に囲まれた空閑地利用のため開設された街路であると読める。つまり坂口町・高町屋と筏場の町並が形成され、その後横町が開設されたということになる。さらに想像をたくましくすれば、微高地上の坂口町・高屋敷住民が低地の筏場の開発に関わり、その後横町が両地域を結ぶために開設されたとは言えないだろうか。さらにその開発主体とは、瑞泉寺を筏場に移転させた時点で、自らの菩提寺とした大橋氏や、浄蓮寺地(■27)に屋敷があったと伝えられる堀田氏であった可能性がある。延享5年図は、横町と坂口町の間「雲州ノ大橋茂右衛門扣ヤシキ」として、近世に出雲松江藩の家老となった大橋茂右衛門の屋敷の存在を記す。また、同図は横町沿いに「堀田彦二屋敷」と記す。これらは大橋氏・堀田氏が筏場周辺に関与していた傍証となろう。筏場は今市場から下街道を延長した先にあたり、先に述べたように、今市場も同時期に町場が発展したと想定されることを考えると、筏場の形成は今市場の発展と連動している可能性もある。

西御堂・船戸の低地も、同様に16世紀に開発が進んだものと思われる。この地域の開発の主体は、西福寺(■10)を中興したと伝えられる堀田氏であった可能性がある。延享5年図は、江口に「堀田彦左エ衛門ヤシキ」を、車河戸縁辺に「堀田ヤシキ」を描いており、この近辺に複数の堀田氏の屋敷があったと思われる。


大橋氏・堀田氏といった津島の有力土豪が、16世紀に天王川東岸低湿地の開発を進めたと推定されることは何を意味しているのだろうか。それは、米之座湊に代わる新たな港湾の整備を意味しているのではないだろうか。大永6(1526)年に津島を訪れた宗長が宿泊したのは、米之座北口の不動院(■14)であり、そこに織田正定・信秀がやってきて連歌の興行を行っている。不動院が織田家の迎賓館的役割を担っていたとすると、16世紀においても米之座湊は機能していた可能性はある。しかし、『宗長日記』が記すように、大永6年時点では既に天王川を渡る橋がかけられており、その橋が天王橋の位置であるかどうかは断定できないが、少なくとも津島神社近辺と津島の町場

を結ぶ橋であれば、米之座湊へは伊勢湾からは橋をくぐって遡上し入港しなくてはならないことになる。勝幡のような日光川・三宅川上流部地域への水上移動には米之座湊は便利であるが、津島の町場や下街道との連絡には遠回りである。また、米之座湊には14世紀以来の米之座商人の権益が強く及んでおり、16世紀の津島の町場の商工業者にとっては利用しにくい湊であったかも知れない。一方、車河戸・西福寺周辺の水域は、天王川の河幅が最も広い入り江状になっており、伊勢湾から遡上すると橋を渡る手前に位置する。少し時代は下るが、文禄2（1593）年と推定される史料では、諸浦の船に津島への集結が命じられており³²、大量の船の停泊が可能な広い水域が津島に存在したことが分かる。この水域こそが、車河戸・西福寺周辺ではないだろうか。米之座湊が日光川・三宅川上流部と津島を結ぶ港とすると、車河戸・西福寺周辺は、伊勢湾と木曾川との流通の結節点として津島を機能させるための港と言える。小島は、信長被官の服部小藤太が堤下町に屋敷をもっていたことや、それと同一人物かどうかは不明ながら、服部氏が津島—美濃太田間の河舟を使って商売を行っていたことを指摘している³³が、この指摘も伊勢湾と木曾川流通の湊を堤下町近くの筏場周辺に比定する本稿の推定と整合的である。『宗長日記』には、橋のたもとから船10余艘に乗って桑名へ出航したことが記載されるので、桑名への渡船場も、筏場周辺に存在したと思われる。以上のように、堀田氏・大橋氏らは、この水域を利用しながら、低湿地を埋めて町場と港湾を整備したと推定する。

巡見街道沿いの中島の東側に複数の寺院が立地することから、中島には16世紀には町場が形成されていたことが推定される。前述のように同時期には今市場も発展しており、中島と今市場を結ぶ道路が必要となる。それが百体通であろう。百体通沿いに面する弘浄寺（■28）は、16世紀半ば頃に創建されたと伝えられており、中島と今市場の町場は16世紀半ば頃までに一定範囲に展開していたと推測される。また、中島と上街道を結ぶ道路として開設されたのが、厨子町であろう。厨子（辻子）とは、中世京都の上京・下京といった高密度な都市空間で、新街区の開発や都市再開発において開設される道路である³⁴。津島の厨子町も、中島の町場と、筏場、今市場、上街道の町場を連結させ、新街区の開発を促進させる道路であり、厨子の一般的理解と矛盾し

ない。

以上のように、津島の景観は16世紀に大きく変化したと考える。それは、慶長4（1599）年までの津島祭では、筏場・今市場・中島が船車を出し、堤下・米之座が引山を出していたこととも関連するだろう。船車を出す3ヶ村は、16世紀以降整備された湊に関連する新しい町場であり、後者2ヶ村は14世紀後期以来の伝統をもつ町場であると考えられる。その歴史的差異が、津島祭に影響を与えていたと思われる。

さて、天王川の水量が減り、徐々に水運の便が悪くなっていった近世には、津島の景観はどのように変化するのであろうか。17～18世紀になると、津島は湊町としての機能よりも、津島神社の門前町としての機能が強くなる。西方寺は、延享4（1747）年に布屋に移転した（24）とされるが、それは参道である天王橋に続く橋詰町が稠密化したことが理由ではなかろうか。その反面、17世紀になると、西御堂・船戸に寺院が増加しており、西御堂・船戸の滞水域の陸地化が進んだことがうかがえる。これは、天王川の水量減少の影響も大きかっただろう。結果的には車河戸を残すのみで、その他の水域は埋め立てられていった。また、慶長13（1608）年以降、中島は下構と呼ばれるようになる。17世紀に中島と下構との間に寺院が創建されることを考えると、中島から巡見街道に沿って下構まで集落が連続し、一つの町並みを形成するに至ったのではないだろうか。

IV おわりに

本稿の考察をまとめておこう。津島は三宅川・日光川の合流部に近い天王川東岸に位置する。両河川の合流地点付近には、入り江状の滞水域があり、14世紀後半以降、その水域を利用した湊が存在した。この湊で荷揚げした物資は、津島の中でも古くから市立てがなされた米之座市・町へ運ばれた。その結果、米之座の町場は14世紀後半から15世紀半ばにかけて形成された。同時期には、天王川の渡し場に直結する街路沿いに苧之座の町場も形成された。また、米之座・苧之座から三本柿街道へ続く布屋の微高地上にも複数の家・寺院が立地していた可能性がある。このような津島の景観は、16世紀頃大き

く変化した。その要因は低湿地の開発と新港の整備である。広大な滞水域であった西福寺・筏場周辺を開発し、米之座湊に代わる湊が整備された。それは有力土豪によって進められ、伊勢湾・木曾川の物資流通とも関連した動きであった。そしてこの湊に面する筏場や、筏場が続く下街道沿いの今市場や巡見街道沿いの中島にも16世紀初期から半ばまでに町並が発展し、これら複数の町場は厨子などの街路によって結ばれるようになった。織田弾正忠家の支配した16世紀前半の津島とは、このような景観であったと考える。津島における低湿地の埋め立てと新港の整備という技術は、のちの安土などの信長の都市づくりに活かされた可能性はある。

中世津島の景観に関する同時代史料や発掘調査成果は極めて少なく、本稿の考察結果も推定の域を出ない。しかし、それは津島に限ったことではなく、多くの中世都市研究においては同様の限界を抱えており、研究の深化のためには時には大胆な推定も必要であると考え。今後発掘調査が行われることにより、本稿の推定に修正・変更が加えられることを期待したい。

また、本稿は第I章に述べたように、尾張国の戦国期城下町の空間構造を考える一つの基礎的作業に過ぎない。今後は戦国期城下町に影響を与えたと思われる他の都市空間についても検討を進め、比較考察を行う必要があるだろう。

付記

津島の発掘調査や資料の所在について、横井さつき氏(津島市教育委員会)・鈴木正貴氏(愛知県埋蔵文化財センター)のご教示を得た。厚く御礼申し上げます。なお、本稿の作成にあたって、科学研究費補助金・若手研究(B)「日本中世都市の空間構造とその認識に関する歴史地理学的研究」(課題番号14780045)を使用した。

- 1 小島道裕「戦国期城下町の構造」日本史研究257、1984、千田嘉博『織豊系城郭の形成』東京大学出版会、2000、前川要『都市考古学の研究』柏書房、1991など。
- 2 守護所シンポジウム@岐阜研究会世話人編『守護所・戦国城下町を考える』2004。
- 3 京極氏の上平寺城下、六角氏の観音寺城、高島越中氏の清水山城屋敷地など。
- 4 仁木宏「寺内町と城下町」(有光友學編『日本の時代史12 戦国の地域国家』吉川弘文

- 館, 2003)。
- 5 鈴木正貴「織田信長の都市づくりの源流」(前掲注2)。
 - 6 小島廣次「勝幡系織田氏と津島衆」(名古屋大学国史学研究室編『名古屋大学日本史論集・下』吉川弘文館, 1975)。
 - 7 福田秀一ほか校注『新日本古典文学大系51中世日記紀行集』岩波書店, 1990。
 - 8 島津忠夫校注『宗長日記』岩波書店, 1975。以下、『宗長日記』からの引用は、同書を用いる。
 - 9 津島市史編さん委員会編『津島市史5』津島市教育委員会, 1975, 小島廣次「津島とお天王さま」(『海と列島文化8 伊勢と熊野の海』小学館, 1992)。
 - 10 津島五ヶ村は, 天文9(1541)年の織田信秀書状(津島市史編さん委員会編『津島市史資料篇2』津島市教育委員会, 1972, 49号史料。以下, 同書に所収される史料は, 市史49のように略す)に初見される。五ヶ村は津島祭で車楽船を出す, 筏場・堤下・下構(中島)・今市場・米之座の5村を指す。
 - 11 黒田剛司『津島歴史紀行』泰聖書店, 2000。以下, 本文で取り上げる黒田の見解は, 同書による。
 - 12 明治24年測図同26年製版「津島町」・「稲沢町」正式地形図。
 - 13 本稿で分析の対象とする津島旧市街は, 「津島村地籍図」甲・丙(愛知県公文書館所蔵)の2枚にまたがる。
 - 14 文禄2(1593)年に, 津島の衰微を回復させるため5年間の諸役免除が認められている(市史146)。
 - 15 井関弘太郎「河道変遷」(木曾三川—その流域と河川技術編集委員会編『木曾三川—その流域と河川技術』建設省中部地方建設局, 1988)。
 - 16 勝幡城の位置については, 以下を参考にした。下村信博「勝幡城」(愛知県教育委員会編『中世城館跡調査報告I(尾張地区)』文化財図書普及会, 1991)。
 - 17 安永年間(1772-1781)成立の『張州雑志』は「御殿図」として津島御殿の地図をのせる(『張州雑志10』愛知県郷土資料刊行会, 1976)。「御殿図」に描かれる堀と図3の水田の区画はほぼ一致する。以下, 本文で『張州雑志』を引用する際には, 本書を用いる。
 - 18 図1の三宅川・日光川旧河道の河幅と津島付近の天王川河幅を比べると, 明らかに後者が狭い。2つの河川が合流しているのに, 河幅が狭いとは考えにくいので, これは明治までに天王川の河幅が開発によって狭められたことを意味しているのだろう。また, 天王川に近い南北道路沿いには上河原という地名も残る。
 - 19 善福寺所蔵。愛知県海部郡津島町編『津島町史』1938の付図として刊行されているものを利用した。
 - 20 深田正韶編『尾張志(下)』歴史図書社, 1969。
 - 21 今井雅晴「初期時宗の発展と宿について」(和歌森太郎先生還暦記念論文集編集委員会編『古代・中世の社会と民俗文化』弘文堂, 1976)。
 - 22 近世にこの付近が, 「城ノ越の揚げ場」と呼ばれていたことも傍証となる。
 - 23 北口を経由して米之座町まで荷を運んでいたとすれば, 北口にも町屋が並んでいても不思議ではなく, 米之座町に見えるような連続した奥行き長い短冊形地割が北口にも確認できるだろう。しかし, 北口にはそのような地割はみえず, 地割からは米之座町に従属する地域といった印象を受ける。
 - 24 市神社の氏子圏は, 北口・米之座・高屋敷・布屋・苧之座・麩屋町・池ノ堂で, 七切と呼ばれる。

- 25 奴野城は、現在の西方寺の場所が跡地とされるが、遺構は確認できない。
- 26 白鳥眞紀「祭り組織から見た津島の重層的な社会構造」(『愛知県史民俗調査報告書4 津島・尾張西部』編集委員会・愛知県史編さん専門委員会民俗部会編『愛知県史民俗調査報告書4 津島・尾張西部』愛知県総務部総務課県史編さん室, 2001)。以下、津島祭の乗り方・車屋の分布については、同書による。
- 27 森平も、本稿と同様に苧之座を古くから形成された町場で、堤下町よりも早くに形成されたものとし、その理由を堤下町・坂口町を通る上街道の新設による町並の変更に求めている。本稿では上街道の新設の可能性は否定できないが、資料の不足により、森の推定の当否を論じることはしない。
<http://nagoya.cool.ne.jp/yomagi/tsushimanorekishi.html>
- 28 なお、今市場を通る下街道は、近世の東海道脇往還である佐屋街道の整備に伴い、その分岐道として機能し、交通量が増加した。他の津島の街路と比して、下街道はあまりに直線的であることを考えると、今市場の形態は全体でないにせよ、近世に改めて整備された可能性もある。
- 29 市史71, 85。
- 30 市史87。
- 31 市史56・59・84。
- 32 市史144。
- 33 前掲注6。
- 34 高橋康夫「辻子 その発生と展開」(同著『京都中世都市史研究』思文閣出版, 1983), 足利健亮「道路名称としての「辻子」考証」(同著『中近世都市の歴史地理』地人書房, 1984)。